

鳥海イヌワシみらい館通信

Vol,40 2021年 秋号



鳥海イヌワシみらい館
マスコットキャラクター
「ワッシーくん」



特集「Come on! カモン! 鳥の家紋」
蜂蜜の森から⑬「日本の蜜ろうの歴史②」
「イヌワシ」7月 秋田県にかほ市 撮影：波多美千子様

Come on! カモン! 鳥の家紋!

我が国では「家紋」が受け継がれてきており、世界に誇る意匠の一つです。インターネットもテレビも双眼鏡でさえもなかった時代、私たちのご先祖様は、自然と共存・共生し、身近に観察したものから、その生物の持つ特徴や、神秘性を一族のアイデンティティとしてシンボルとしたようです。鳥たちがどのように昔の日本人にとらえられていたのかに着目して観察してみると面白いかもしれませんね。

「鶴は千年、亀は万年」と言われたように、鶴は長寿の象徴です。鶴と言えばタンチョウが日本画の題材として多く描かれていますが、マナヅルなどの種が各地で観察されていたのではないかとされています。



鶴の丸



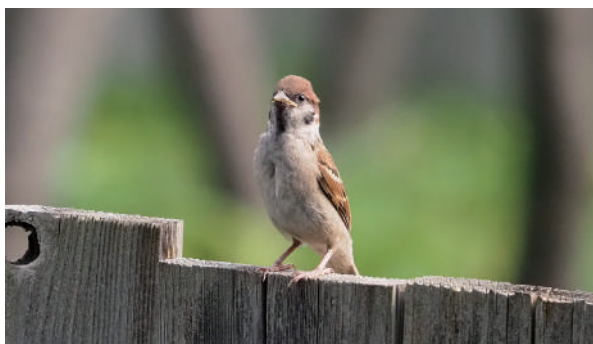
アネハヅル(撮影:長船裕紀)

「舌切り雀」などのおとぎ話にも登場するくらい、昔からなじみが深かった野鳥の代表です。冬季に寒さから身を守るために体を膨らませる行動から「膨雀」と呼ばれ、「福良雀」と当て字されたことから縁起物として人気がありました。

近年は生息環境の改変より生息数が減少傾向にあります。



膨雀



スズメ(撮影:渡会裕司)

マガン、カリガネなど冬にやってくる仲間の総称で、ブルーインパルス顔負けのきっちりと整った編隊飛行をします。国語の教科書にも採用されている「大造じいさんとガン」などでも描かれ、1970年頃まで食用として捕獲されていました。金属的な甲高い鳴き声から「良い知らせを運ぶ」として武家の家紋に採用されたようです。面白いのはほとんどの図柄に本来の長い首が描かれておらず、野鳥観察に慣れた人から見ると到底ガン類には見えない図柄となっています。



丸に二つ雁金



マガン(撮影:渡会裕司)

体 全体を描いた図柄もありますが、羽根だけが図案化された紋が多く、その場合「鷹羽」という呼び名になるようです。昔、弓矢の矢羽として利用されていたことに加え、勇猛な生態から武を重んじる武家に好まれた図の代表です。



丸に違い鷹羽



オオタカ (撮影: 長船裕紀)

水 辺に複数羽で生息するシギ・チドリ類を図案化したものですが、「千鳥」の語呂合わせから「千の福を取る」として縁起を担いで利用されたようです。波模様と合わせて描かれることもあり、波の満ち引きも兵法に通じるとのことで武家の家紋にもなりました。



波に千鳥



コチドリ (撮影: 横山博)

サ ギは神の使いとされており、神紋として神社等の紋に利用されました。日本神話に登場するヤマトタケルは、死後、白鳥となって飛び去ったとされていますが、これはハクチョウではなくサギとする説もあります。



鶴紋



ダイサギ (撮影: 渡会裕司)

実 在するカラスの紋様ではありませんが、伝説の鳥「八咫鳥 (やたがらす)」は3本の足がある霊鳥であるといわれます。古事記では八咫鳥は導きの鳥として登場し、熊野本宮大社の神紋となっています。また山形県鶴岡市の羽黒山にも八咫鳥の伝説が残っています。



八咫鳥



八咫鳥 (鶴岡市羽黒山山頂のオブジェ)

庄内の動物情報コーナー

庄内地方では、平年より水稻の成長が早かったようで、早めの刈り取りが行われていました。県内は台風の接近はありましたが、大きな被害は無かったようです。このまま農産物等への影響もなく台風シーズンが過ぎ去ってくれることを願います。引き続き各地の自然情報をmoukin@raptor-c.comまでお寄せください。



2021/7/19 「ニホントカゲ」庄内町
メタリックに滑らかに光る爬虫類。日向ぼっこしている姿を観察できますが、すばしこくてなかなか捕獲が難しいトカゲですね。
撮影：秋葉様



2021/8/20 「ツマグロヒメコマツキモドキ」酒田市
Choo-Choo Train? いや、縦はきつい！
団子三兄弟だな？！
撮影：長船裕紀



2021/9/5 「アサギマダラ」酒田市
浅葱とは薄い水色。北日本から、遠くは沖縄方面まで飛んで渡るチョウとして知られています。マーキングは無さそうだ！
撮影：小池侑多様



2021/9/1 「オオジシギ」酒田市
尾羽を広げて優雅にご挨拶してくれたようです。旅鳥なので、移動中ひと時の滞在。出会えるかどうかは運しだい。
撮影：齋藤修様



2021/9/16 「シロマダラ」遊佐町
一部ではまぼろしのヘビと呼ばれる。夜行性が強くなかなかその姿を見られないという事ですが、最近、ネットやカメラの普及で情報が集まりやすくなってきた感じがします。爬虫類を食べるので飼育が大変そうです。撮影：齋藤堂貴様



2021/9/25 「ハチクマ」酒田市
幼鳥が南下していきました。越冬地に到着は11月中旬だそうで、今頃どこまで行ったかな？
撮影：宇佐美様

全国の動物情報コーナー



2021/9/29 「ムシクイの仲間」庄内町
早朝のバードストライク！窓からゴツンと音がして飛び出してみたら、まだ幼さの残る鳥が落ちていたそうです。その後自力で飛びたって行ったとのことで良かったですね。
撮影：清原様



2021/8/29 「アカギカメムシ」秋田県
ど派手なカラーと、カメムシにしては少々大きめのサイズ！東北地方では普通観察できない南方系のカメムシ！良く飛ぶ！
撮影：後藤勇様



2021/9/25 「ウサギコウモリ」秋田県
大きな耳がその名の由来。「ワシ、血は吸わんがな・・・。ガが食べたいだけやがな・・・。」
撮影：長船裕紀

イベント開催報告

○「鳥海山昆虫ラボ！」

7月24日(土)「鳥海山昆虫ラボ！」と題して、昆虫採集と標本作りのイベントを開催しました。

庄内昆虫同好会の協力で、午前中は鳥海高原をフィールドに昆虫採集をしました。チョウやトンボ、クワガタムシなど多くの昆虫を採集することができました。昼食をはさんで午後からは自分で採集してきた昆虫を使って標本作りをしました。近年、子供達が体験することが少なくなってきた命の体験授業を通して、「生命」に触れ、尊さを学んでくれたことと思います。標本箱に納めて、親子の夏の思い出となれば嬉しいです。命について語り合う機会になればと思いました。学校の自由研究として利用してくれた子供もいたようです。新型コロナウイルスへの対応もあり、少人数での開催となってしまう、今年の開催を楽しみにしていたにも関わらず、参加できなかったという皆さん本当に申し訳ありませんでした。来年度はこれまで通りの開催ができることを祈ります。



親子で協力して昆虫採集



○「夏休みクラフト体験教室」

7月26日(月)～8月15日(日)「夏休みクラフト体験教室」を開催しました。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、予約制とさせていただき、体験会場で人が密にならないように時間とエリアを分けて開催しました。

今年はじめて開催した「絶滅チャーム作り」「酒田市産木材のボールペン作り」は予想を上回る申込がありました。素材選びから、デザインなど各々が想像力を発揮して自分だけの作品を作ってくれました。積極的な木材の利用をすることで環境が守られ、「絶滅」を意識することで生き物の保全についても理解が深まっていくことと思います。

参加してくれた皆さんありがとうございました。



酒田市産木材を使ったボールペン作り

○フィールドワークショップ「森林とイヌワシふらすSDGs」

9月4日(土)フィールドワークショップ「森林とイヌワシふらすSDGs」を開催しました。このイベントは、イヌワシの主な生息地である国有林を所管する林野庁と、イヌワシを国内希少種として保護する環境省による共同イベントです。

庄内森林管理署より、高橋守署長、高橋和幸総括森林管理官、小林未知子森林技術指導官、前川恵介森林整備官、環境省鳥海南麓自然保護官事務所より澤野歩美自然保護官、長船裕紀自然保護専門員にご案内いただきました。

すっきりしない天候ではありましたが、開始当初雨は降っていなかったこともあり、林野庁庄内森林管理署の施業地である山形県遊佐町の国有林内にて国有林管理のお話をいただきました。森林の役割などに加え、現在の我が国の森林と林業の現状についても詳しく解説していただき、スギ人工林の実生苗なども観察させていただきました。

午後からのイヌワシの観察会は、あいにくの雨模様となってしまう、急遽観察予定地を変更し、イヌワシの生息環境を観察しながら、生態について解説をしました。雨が強くなってきたので、フィールドでの活動を早めに切り上げ、室内で質問の時間としました。

林業行政、環境行政への質問だけでなく、エネルギー問題や鳥類に関する質問など大変多く寄せられ理解が深まってくれたと思います。林野庁庄内森林管理署の皆さん、参加してくれた皆さんありがとうございました。



林野庁職員による国有林内での解説



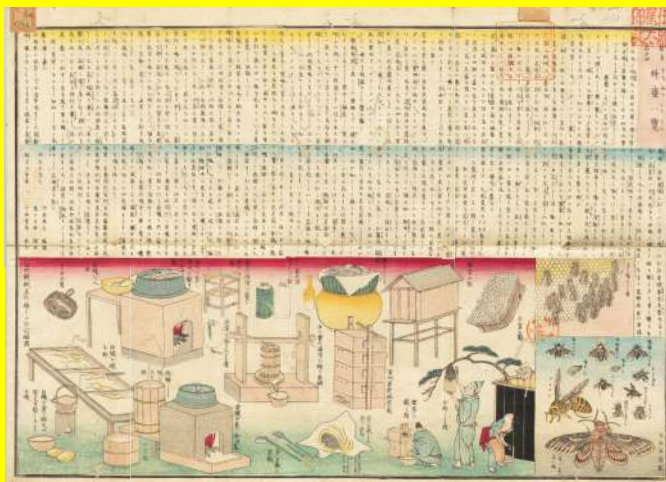
人工スギ林の実生苗

この日フィールドにいた鳥:トビ、ノスリ、カケス、キジバト、アオバト、ハシボソガラス、アマツバメ(計7種)



蜂蜜の森から 第19回「日本の蜜ろうの歴史2」

山形県朝日町で蜜ろうそくの制作を通して、自然のすばらしさを伝えている安藤竜二さんによるコラムのコーナー第19回目です。蜂蜜の森を通して私たちが暮らす環境を見つめなおしてみませんか？



「教草十 蜂蜜一覧」 国立国会図書館蔵



「重箱式巣箱」

1872年(明治5年)に出された『蜂蜜一覧』(丹波修治 編撰、溝口月耕 図画)には、重箱式巣箱も含めた詳細な養蜂道具が描かれています。

特に目を引いたのは、蜜ろうの精製についてです。ハチミツを搾り終えたミツバチの巣を布袋に入れ、大きな鍋の底に沈めて煮て蜜ろうだけを浮かび上がらせる優れた方法です。さらに日に晒し、脱色させて白ろうを作る様子まで描かれています。ハゼろうと同様に、びんつけ、艶出し剤、膏薬などの医薬品や化粧品原料として使われていたのでしょう。

では当時、はたして蜜ろう100%のろうそくは作られていたのでしょうか。私は作られていなかったと推測しています。その理由は製造方法にあります。江戸時代の和ろうそくの製造方法は、芯にろうを手で塗り重ねていく手掛けという方法でした。この手掛けでは、蜜ろうそくは作れません。ハゼろうの融点は50℃前後ですが、蜜ろうの融点は65℃前後。この高温下

のろうに手を入れて整形すればやけどをしてしまうからです。

日本で本格的に蜜ろうの量産ができるようになったのは、明治時代にアメリカからセイヨウミツバチが導入され、全国に近代養蜂が広まってからでした。しかし、ろうそくに関しては、明治時代初期にはコストの安い石油系の「パラフィンろうそく」が作られるようになったため、蜜ろうはあっても、蜜ろうそくが産業として作られることはなかったのです。



安藤竜二 (あんど う りゅうじ)
養蜂を学んだ後1988年に、日本ではじめての蜜ろうそく製造に着手。ハチミツの森キャンドル代表。NPO法人朝日町エコミュージアム協会 副理事長。アシナガバチ畑移住プロジェクト主宰。近著『手作りを楽しむ 蜜ろう入門』(農文協)・編著『朝日岳山麓養蜂の営み』(朝日町エコミュージアム研究会発行)



Illustrated by Masami Tsuno

©鳥海イヌワシみらい館

普及啓発担当

今年はブナの実の凶作地域が多いようです。近畿では観測史上最も早い木枯し一号。庄内には秋が無かった気がします。(本)

希少種保護増殖等専門員
庄内にも「違い鷹」の家紋が多数見られ、家ごとに微妙に違ったりします。私の実家の家紋は鍛冶屋にちなんでか「ごどく」の足がモチーフでした。(長)

事務局

ソフトバンクホークス長谷川選手引退。いつも眼光鋭い姿はまるでえものをねらう「鷹」のようでした。庄内の「鷹」(スター)15年間お疲れさまでした。(清)

鳥海南麓自然保護官
寒くなりましたね。毎朝出勤時に、ハクチョウも隊列を組んで出勤していくのを見てほっこりしています。(澤)

編集後記&施設情報 鳥海イヌワシみらい館 11月~1月の開館情報

開館時間・・・9:00~16:30

入館料・・・無料

休館日・・・年末年始、12月(火)、1月(火、土、日、祝)

臨時休館日はホームページにてお知らせします。

ホームページアドレス: <http://www.raptor-c.com/>

<https://www.facebook.com/Raptoreagleraptor>

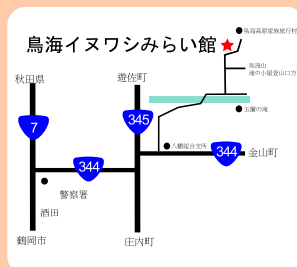
猛禽類保護センター

〒999-8207

山形県酒田市草津湯ノ台71-1

TEL 0234-64-4681 FAX 0234-64-4683

E-mail: moukin@raptor-c.com



鳥海イヌワシみらい館通信
Vol.40 秋号

発行: 猛禽類保護センター活用協議会
(事務局 鳥海イヌワシみらい館内)